

『津軽諸城の研究(草稿)』

福井敏隆

みちのく双書第三十四集『津軽諸城の研究(草稿)』は、同双書第三十三集『南部諸城の研究(草稿)』と姉妹編をなす、故沼館愛三氏の遺稿である。出版に際して、御遺族、遺稿を所屬しておられる八戸市立図書館、出版元の青森県文化財保護協会の三者が、御尽力したと聞いている。我々、歴史を研究する者にとって、この遺稿が貴重な共通財産となつたことは、大変うれしいことである。発行は、奥付けによると昭和五十二年十二月であり、もはや三年を経過した本であるが、今文化庁の全国調査事業の一環として、本県でも中世城郭の調査が行なわれている以上、津軽地方の調査には必携書と考え、あえて書評の筆をとつた次第である。もとより浅学非才の私にとって、この書の内容に十分打ち込んだ書評は出来ないが、仕事の関係で(板碑の所在調査)、津軽地方を少し歩いてみる事が出来たので、気付いた点などをのべさせてもらうことにする。

はじめに、この書の構成についてみることにする。大きく三つの部分から成り立っているといえよう。その一は、「津軽地方における諸城の分布」分析であり、イ、外ヶ浜地方 ロ、西浜地方 ハ、十三湖地方 ニ、津軽内陸地方 と地区別にとらえている。そしてそれらの諸城(城館)一五一を、立地条件・郡別・城の形態によって、それぞれ細分類し

ており、津軽地方の諸城分布の特徴を、南・中津軽郡の平野を舞台とした文化の発達があったとし、近世の津軽為信の統一が、この両郡を制することで達成されたとしている。その二は、「津軽に残された歴史上の疑問」として、三つの城館の場所の比定を行なっていることである。その三つとは、シリベシの地・持寄城・尻八楯(館)である。阿部比羅夫が政所を置いたシリベシの地は、津軽の海岸地方に求めるべきであり、持寄城は中津軽郡相馬村・大堀平(長者森北側)を中心とし、東は紙漣沢西側一帯の高地、北は岩木川に及び、南は坂市より參詣森山に至る谷地、西方は高野堤より高野に至る線の範囲とし、南拠点として藤沢館(メノコ館)、北拠点として岩木村高館をもあげ複合的にみている。尻八楯については、青森市郊外のシリベシ館に比定することが適当であろうとべられている。このあと、特に一項を立てて、津軽諸城の総括的な特徴をのべているが、そこでは真に城郭として価値あるものは少なく、又特筆すべき特性を有しないと、きびしく分析している。その三は、「碓ヶ関館」に始まり「柴崎城」におわる一五一の津軽地方に残る城館一つ一つについて、所在地・起源由来・規模・城館の価値などについて解説している。勿論この部分がこの書の大部分を占め、城館の興亡によって津軽の歴史を物語っているといえよう。

概要は右の通りだが、一読して一番痛切に感じた事は、著者が城館に對して立地・地形・形態を重視した戦略的な視点をもって臨んでいるということである。一五一の城館一つ一つの説明に、それがよくあらわれている。城とか館は、本来軍事的要素を十分考慮して構築されたものである。だが、実際その場に行ってみると、我々は意外と歴史的感傷にひ

たつて城館を眺めていることが多く、改めて著者の洞察のするどき、一貫性に驚かされる。一軍の将として、どのように攻めればよいか、又どのよう守ればよいかを、実に適確に価値判断している。例えば、津軽為信が津軽統一のため最初に攻め落とした、南部高信のいた石川城については、有利とする点として、(イ)隘路の確保 (ロ)展望瞰制の良好 (ハ)城地の堅固 をあげ、不利とする点として、(イ)城相の険悪性 (ロ)背面の薄弱性 (ハ)西北の側面防備力の欠陥 をあげている。

この点は、やはり著者の軍人としての経歴が自然とにじみでたものである。横道にそれるが、著者の略歴を紹介すると、故沼館愛三氏は、明治二十年八戸に生まれ、陸軍士官学校を卒業、主として北海道の部隊に勤務し、昭和四年四十三歳の時、陸軍少佐で退役した。翌年東京高等師範学校に学び、昭和七年卒業後静岡中学校に奉職、地歴を担当した。その後二度応召し、中支・北滿で実戦に参加している。昭和十八年五十七歳で帰還し、終戦後故郷に帰り、昭和二十五年死に至るまで、南部・津軽地方合わせて四百数十の城館を実地に踏査したという。戦術眼・地理眼・歴史眼を兼ね備えた著者のきびしい調査が目につく。

しかし、軍事的側面の記述が強いかわりに、それぞれの城館に住んでいた中世の地侍の支配領域についての考察は弱い気がする。当時の地侍たちは、その勢力規模に応じて領地をもっていたはずである。それは城館の規模の大小と、密接な関係を持っていたと思う。今回津軽地方を実際に歩いて、いくつかの城館の現地に立つことが出来た。そして感じたことは、それらの規模が非常に小さいということである。そして指呼の間に又別の城館があることが多かった。勿論、規模の大小については、

城館跡が往時のままであるはずがなく、原形をとどめなくなってきている現在、全容を正確にうかがい知ることが出来ない点、注意が必要である。だが一〜2kmか、せいぜい四〜5kmの距離をおいて、又他の城館があるということは、それらの城館が単独で同時期に存在したと仮定するならば、その支配領域はかなり小さいものと考えてよいだろう。当時の城館は、互いに連携をとりあった一族、もしくは主従の城館と考える必要があり、そのような考察もみられるが、単に個々の城館の分析だけに終わっている感じが強く、この書の内容に一つの物足りなさを感じる。

又根本的な問題では、この書では城と館の概念についてはっきり区別が出来ていない点もあげられる。最も、私にとってこれはむずかしい問題である。この書で取り上げた一五一の城館のうち、城と名のついたものは、わずか十九にすぎない。若・御所・要害が各一あるほかは、残りすべて館である。これら一二九の館は、地元では○●城とか××城とか呼んでいる場合もあるが、遺構からあきらかに平常時の住居としての館、山城の要素をもつ戦闘用の館に分類出来る。これらを同列に扱っていいものだろうかという疑問も生じる。さらに蝦夷館(チャシ)の問題もある。平地を見おろす高台か、舌状台地の突端部に位置している館は、すべて蝦夷館にその起源をもとめている。伝承を全く否定するわけではないが、一つの公式があって条件が合うものは機械的に、起源を蝦夷館に求めているような気がしてならない。この点は今後十分な調査研究が必要であると思う。

以上、まとまりのない私見をのべてきた。的はずれな意見もあったと思う。故著者に代わってご指摘いただければ幸いである。

（みちのく双書第三十四集 本文四二三頁、青森県文化財保護協会、  
昭和五十二年、頒価二五〇〇円）  
（青森県立郷土館研究員）